徳島新聞　　令和4年9月9日（金）

機器検診で早期発見へ

10代女子に多い「脊柱側彎症」

徳大大学院の山下特任准教授

ＣＦで最新機種導入　来年度、小中校で実証試験

徳島大大学院医歯薬学研究部の山下一太特任准教授（整形外科）が、10代の女子に多く、背骨がねじれを伴いながら曲がる「脊柱側彎（そくわん）症」の発見率を高めるため、医療機器を使った検診の実証試験を来年度に県内の小中学校で行う。側彎症は初期に発見すれば効果的な治療ができるが、県内では検診に機器が使われておらず発見率が低い。実証試験で効果を確認し、普及につなげる。

脊柱側彎症は重症化すると呼吸機能障害や歩行困難などが表れる。患者の約9割は原因が分からない「特発性」。中でも10歳以上で発症する「思春期特発性」が多く、大半を女性が占める。軽度のうちに発見できれば装具で矯正して進行を抑えられるが、重症化すると手術が必要になる。

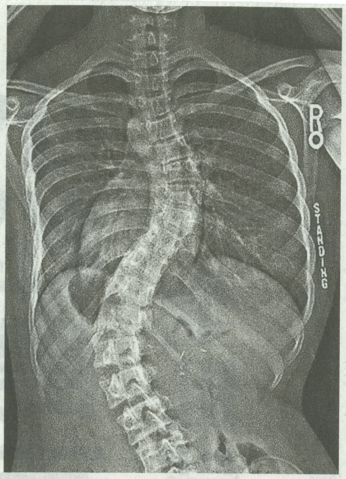
同大によると、小中学校では側彎症の検診が義務付けられている。ただ検診方法が統一されておらず、徳島を含む多くの地域で学校医が触診や視診で判別するため、軽度の症状を見落としがちだ。

国の統計では、医療機器で検査するのは12都府県で、視診や触診で判別するのは35道府県。機器を使う地域は14歳女子の発見率（2007～15年の平均値）が高い傾向にあり、東京や千葉、広島は2％を超える。視診や触診の地域は約9割が1％以下で、徳島は全国で5番目に低い0・4％だった。

実証試験では、賛同した小中学校5～10校をモデル校に選び、年1回の定期検診で機器を使う。機器は幅約1メートル、高さ約0・3メートル、重さ約12キロで、三脚に固定して3方向から背中表面の凹凸やねじれを撮影し、3次元測定する最新機種。操作が簡単で、視診や触診では気付きにくい小さな症状も検出できる。

機器の購入費計730万円のうち500万円を、一般社団法人大学支援機構（徳島市）が運営するクラウドファンディング（CF）サイト「Otsucle（おつくる）」で募っている。期間は11月30日まで。目標額に達しない場合でも試験は行う。

山下特任准教授は「医療機器での検診の有効性を実証し、国や県が機器を使った検診を始めるきっかけをつくりたい」と支援を呼び掛けている。（南志郎）



脊柱側彎症の10代女子のエックス線写真。背骨がねじれて曲がっている（徳島大提供）